

レイケアニュースレター Laycare

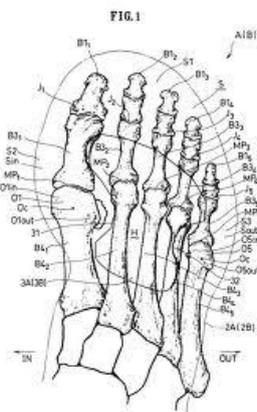
VOL.31

約 500 万年も前から二足歩行を始めた人類は、歩くことをより快適にするため履物を開発しました。

革が使われた形跡は約 4 万年前、革を履いていたと思われる痕跡が足の骨に残っています。さらに時代がすすみ紀元前 2000 年ころのエジプトで貴族がシユロの葉や動物の革でできたサンダルを履いていた記録があります。その後靴の原型が完成したのは、紀元前 100 年のローマ。革靴の組合つくられ、革製のサンダルやスリッパ、足首まである靴が売られるようになりました。

革靴のスタート

一枚の革を使用して足を包み込むもの、ストラップをつけて足の裏を守るサンダルからスタートしました。このスタイルは紀元前のから現代まで足を保護する道具として作られました。



革靴の転換期

16 世紀頃のヨーロッパで木型を使って革靴を作る技術が発明され急激に生産性が向上しました。

木型を使用することで、同じサイズ、同じデザインの革靴が簡単に生産されるようになりました。

生産が簡単になると、ファッションに合わせたデザイン性のある靴が好まれるようになります。

本来足を守る役目よりも足を美しく見せる目的、デザインが重視されるようになりました。

左右のない靴

西洋の靴は木型を使って大量生産が可能になっても依然として左右のない靴が作られていました。19 世紀になり足の健康や機能問題に関心が寄せられてやっと左右別々の木型を使って靴作りがなされました。

日本も明治初頭に革靴が浸透しますが、それまでは下駄や草履でしたが、これも左右の区別のない履物です。

なぜか、バレエのトゥシューズはいまだに左右がありません。



大人の学習 II

Lesson3

靴の話

木型を使った革靴づくり①

木型（ラスト）



木型（ラストとも言う）は靴の基本的なフォルムを決める、重要な道具です。

木型の寸法や形は足の寸法や形と比べてみると、かなり違った形をしています。

つま先部分には歩いたときに足が靴に中で前後したときの余裕（捨て寸）があり、足よりも最低10mmほど長く、逆に足幅は足が動かないように、周径で10mm前後、狭く作ってあります。

他にも歩きやすいようにかかとの高さ、トウの跳ね上がりなど、人間工学に基づいた歩くための機能が盛り込まれているのです。

靴が体の一部になるような理想的な履き心地、そして、より美しく見えるスタイリッシュなデザインを目指して削られます。靴はこの木型造りが原点となります。

木型が出来上がると次の工程として、実際のデザインの下になる型紙作りとなります。

削りだした木型（ラスト）全体にデザインテープを覆うように貼り付け、木型の底の端でテープを切り離します。次にセンターラインを甲と踵に引き、デザインを木型に描き入れます。

デザインが描けたら先ほどのセンターラインから、内側・外側の二つに切り分けます。それぞれをはがし型紙用紙に貼り付けます。

内側・外側のパターンが出来たらその中間である中間型を作製します。中間型をもとに今度は「決め型」と言われる実際に裁断する型紙を作成します。



型紙が出来上がると、いよいよ裁断の作業に進みます。

型入れした型紙をあてがって裁断用の革包丁を入れます。大量生産では金型を作り機械で裁断しますが、人の足は複雑な曲線で出来ており、それに自然とフィットする部品の革を、機械で垂直に切った革よりも人間の手で裁断した方が手間はかかりますが、よりフィットする靴に仕上がります。

次号に続く

参考文献：社団法人 日本皮革産業連合会

株式会社レイケアセンター
〒541-0054 大阪市中央区南本町 4-2-10 本町永和ビル8階
06-6245-7441
東京レイケアセンター
〒163-0809 東京都新宿区西新宿 2-4-1 新宿 NS ビル9階東
03-6279-0840

レイケアニュース編集室
今月のレイケアニュースはいかがでしたでしょうか。
ご意見ご感想をお寄せ下さい。
「レイケアニュース編集室」
Info@laycare.co.jp